

相  
冊  
卷  
1.290

同  
書  
印

序

一銭の施—羅漢寺とあり江戸の塵積りて  
佃島よりや竟舞の時代ともふも今までの  
御代とあるや旗、た鼓打人も皆あは  
れし、の流はあまの友を身あたまを  
江戸のちりたるを名、よえて五冊とあり  
り金庫の何れをよか

明治廿九年  
九月十七日  
購求

山  
之  
内  
全  
目  
上

江戸塵拾 卷之壹

目録

一 靈符之社  
 一 疱瘡之児  
 一 蛇除之守  
 一 玉造社字  
 一 常大般若  
 一 平沢之占  
 一 京極之鑑  
 一 砂羅双樹

一 大六天社  
 一 不轉之守  
 一 幸神之社  
 一 富士参蛇  
 一 雷之生捕  
 一 浅草水鉾  
 一 甲子立花  
 一 石の閻魔

江戸塵拾 卷之壹  
 目録  
 一 靈符之社  
 一 疱瘡之児  
 一 蛇除之守  
 一 玉造社字  
 一 常大般若  
 一 平沢之占  
 一 京極之鑑  
 一 砂羅双樹  
 一 大六天社  
 一 不轉之守  
 一 幸神之社  
 一 富士参蛇  
 一 雷之生捕  
 一 浅草水鉾  
 一 甲子立花  
 一 石の閻魔

一 義 真之矢  
一 王 子 火 繩

一 咳 之 老 女

江戸塵拾

卷之七

灵符の社

真宅灵符の社所々々多々々々好又善薩の縁中宝  
曆十三年奉所三目娘三三印灵験を得て居有也  
符神を勧請有額北辰宮之書三升親和守年  
毎年八月祭礼あり

大六天社

永田町兼松家の所々々々有る老田道灌勧請を  
月乃おろすと煩や人を懸る忽平愈々々々好也

不轉の守

赤坂と井谷、谷家開くと人ありて、志賀隨翁傳者  
て此守を所持し人災難を除く神也。一年に祭礼  
の折、糶所より家の子跪臥の上を祭礼の牛と引  
渡り父母より又ある人肝をり介たし、果をよ  
程ゆき正氣甘忠身、角いさひたまき、平の地、縁りの  
不思議とい通りの人も親に向ひ尋ぬ、谷家宗のちるがれ  
の守をうけむたらし、外、何の子細は、いふ然も疑ひも  
くは守のまじ持るべし、たかんど。

志賀隨翁平信長公の臣也世々のいひて、海山出谷

家、風をたのしみと、長生と、有徳院公

御代江戸召あせらさし、千時年百七十三文とさし

蛇除の守

松平大和守御足輕が、何果是をせり、蛇の夢想の由  
此守を所持し人蛇を、年、い、又、人  
る、守を、以、白を、毒氣流も、出、愈  
の、救人の也。

幸一神の社

目白、何人の勧誘せ、て、此、守、社、に、お  
て、不、時、の、時、の、救、人、の、社、に、

及びこの所の人大にまひきそ荒神のよさを改め奉り  
書し其人をまやまけしりて一書を記す早よ  
ありと云

玉造の社字

北平柳の少。稻荷社なる此所の西人伊勢を名をなす  
才稻荷を信仰し一年大おのり出て大坂にて玉造の稻荷人  
詣り宮造の侍を拜し奉り江戸を詣りし之柳の稻荷のま  
を玉造の社とて造るま時、宝曆十一の年也

疱瘡の呪

玉沢るこころは是をぬれ生國服あふふ唐侍の御士即  
此事の大野輝に先んて才矢を打し海を過りし其人の  
才不を様と人よりかたをこころを考りて才矢打つて  
向ふ其人自らけりしあつてもやまのこころは疱瘡の  
神なり油の疱瘡の除の字をよふしと云二才矢を打し礼  
美を言し是を身と様記し別々、と云江府に奉りし呪  
を言し始めの事と云遊するところ一即けが次才矢を海の方  
りて下り池に歸し信を言ふるに道に代敷島あり

富士各の蛇

助信富士権現各礼六月朔日妻世果て蛇を信りてあき  
宝永の此百蛇を八と云ふ者ありて是をたしりて各礼の日

市に賣りたるは跡に細工を以て漢人求て其年の味江に申  
疫癘の時を以て家々を以て時を以ての蛇を持て家々を以て  
疫癘のうまを以て是より富士を以て妻を以て蛇を以て  
当所の名産と云ふ也

常 大般若

山下内瑞島信濃守に云く是年中三月中大般若を  
持読せしむるに云く此の如く云く

雷の生捕

外務田永井伊賀守の元文四年六月雷落る次方之雷を以て  
一つの獸を以て上えぬ所を人大に云く此の如く云く

おころぬる今家汁物と云く是年三月十日に事臣に  
せしむるに云く此の如く云く

浅草水鉢

浅草観音寺の左に唐寺の如く浅草の如く  
ありし是の和三年夏木松町仙石因幡を奉納せしむる  
観音別当仲法院の寺持事と云く是の如く云く  
の如く云く  
仲法院の如く云く

系経家鑑

京極家の鑑、明水切り他家にあり先視代木子鑑

盛綱宇治川に夜戸をたの先陣に水を流しし高名なる鏡  
の形なり

甲子 五花

笠置上寺御霊石別當貞松院池の坊流の立石の主人即ち  
當寺に秘法大阿闍梨の大黒天あり甲子の日詠人三葉宿をゆ  
る様をいふ日立色数瓶をよみて詠う人といふ事を目を  
警めしる也

沙羅 双樹

四尊天王の庭にあり元文の始の宿禰のふかき時を重原守  
納し時日光寺の勤役ありしをけ本中に宗若寺とて記す

義 興 の 矢

吾義興の官道也、其の矢也、王子也、郷兵百姓あり、南より北  
矢、記載あり、才よりあり、尾をあり、王子いさりの紙細工の柳介  
思ひ付て此矢を拵へ、昔よりあり也、今も矢の名物とあり  
近江室原改元の頃より始なり

石 の 留 魔

金地院寺中の玄冥のあり、南朝家より奉納し、字義に  
南朝の伝はるる夢を依て、留を以て、石を以て、石を以て、  
時を以て、道中、自分の家物にてせらるる、高井三良、石像  
あり、少くも、重なる、陸尺、其の、石、計、あり、心、地、あり



方角の也。経麻布の下中。その庭の内。重き。金地院檀  
長老。其夢。依し招清。今の時。其へ。諸人。あら。其へ。を。さ。び。ず。  
又。せ。し。ト。茶。豆。入。を。信。て。死。を。く。こ。し。奇。特。も。る。

咳の老女

華地。福華丹。守中。有。さ。い。ぬ。り。高。尺。等。の。自然。石。を。老  
甘。の。瓶。を。咳。の。死。を。く。こ。し。早。速。を。愈。ま。し。神。石。也。諸。人。豆。入。せ  
んと。茶。を。持。て。此。石。の。下。に。く。り。ぬ。こ。ら。ふ。子。を。く。こ。し。を。

王子火縄

王子の名物也。昔の火縄。火口より。燃。鉄炮の火縄。火口ま  
と。り。て。燃。草。の。光。の。か。し。王子の。木。火。取。り。鉄。炮。火。縄。也。

為事家の下。有。さ。い。ぬ。り。鉄。炮。火。縄。の。足。軽。き。を。よ。う。と。す。

平沢の占

ある。村。末。沢。所。の。居。る。平。澤。左。内。の。占。道。の。妙。を。得。箱。の。形。を。  
物。を。と。り。て。平。の。占。或。時。平。手。や。研。を。百。包。当。り。と。す。子。を。  
取。九。九。品。を。と。り。一。品。を。お。違。け。一。包。を。百。包。と。は。る。左。内。  
取。く。考。へ。占。を。知。り。ぬ。り。と。云。や。研。を。取。り。尋。は。る。是。は。陰。  
陽。一。身。に。得。り。た。り。人。也。の。人。者。く。こ。し。不。吉。病。を。お。お。り。  
こ。ら。や。と。り。や。研。を。打。て。左。に。と。り。歌。舞。伎。役。者。の。名。と。し。  
ニ。ま。さ。き。左。内。ま。ゆ。ぬ。ら。き。也。と。云。所。川。邊。に。仙。真。を。し。す。や。ぬ。  
べ。一。仙。魚。の。か。三。十。の。信。の。実。の。廿。瓶。の。世。を。く。こ。し。ぬ。た。と。り。

果ては憂へ下也一守る人々大なる感心也

江戸塵拾 君を記

江戸塵拾 卷之二

目録

- 一 氷の字 石
- 一 エボシ 石
- 一 力持 石
- 一 石ナマス
- 一 二本櫻樹
- 一 ウワバキ
- 一 櫻の井
- 一 小町の井
- 一 鮎 石
- 一 蠟石水鉢
- 一 水分々石
- 一 籠ノ甲石
- 一 楓之木
- 一 大墓
- 一 小町堂
- 一 御用の櫓

巨大根  
見り淵

橋臺の山伏  
長沢稻荷

江戸塵拾巻之貳

水之字石

平川御門外市地端在り。往來一向にして長く出たり。石  
き丸の内。水之文字を向。此石を踏人可也。必しも  
落る。いづれ何人の崩り。し。これを知る事

鮎石

赤坂町の柳社の西。多し。是を向ふ石垣の中。あり  
大。五。す。汁。り。石の鮎を作り。形。石垣をあり。是を入  
何人の作り。し。い。す。少。知

名石

市谷御門掛紙の石垣に多様な石也豊三豊三  
程石を以て新築すべしのかたわら、  
名付たる

蟬石の白糸陣

松平大和守成江守殿の上向き書院の白糸陣あり  
あり石を大六尺横三尺より五尺余あり  
大石即り

氷分の石

深井松平義の守成下向きさくら池の中、  
凝着す、此石、  
流依り

石 鯉

龜井天孫神の龜井戸より流き出る水の  
計の鯉の形も作りし石あり、  
元のまゝの作りありしは、  
元の名の通りありしは、

力持の石

浅草法王の寺の地蔵の像の石、  
持し、石の彫りけり、  
持し、石の彫りけり、

龜の甲松

上野寺の松の樹の形、  
寺の松の樹の形、

上野は古き古き説に台徳院様定氏の神女は尾  
上道中東北の月夜路の邊つらふより此所を  
をたけさせらるゝ跡跡の神人の見えしを  
思も跡人  
植り松言保の比まてりし也

二本 櫻

武蔵所杉田舎に在りしを削りて拾得る所の古き梅  
是の古き梅人目を驚かししよりして花開きし時又下  
馬場谷に在りし梅の中より一木を志し梅を  
杉田の梅

むら

柳云杉田の梅は寛政四年七月五日の火焼く

伊勢の梅は於々大梅なる有り當時は大隅の  
世々古き梅は伊勢家数絶は今の梅は  
を削りし

楓の 大木

三切通 金地院の玄奘前より武拾軒の寺に在りし  
楓也かゝる楓は日本に希なりし楓の末より如く  
廿五の楓也言寺の末より遠くある事ありし  
火災也 大なる大木も依り也

山 ワバ

麻布并樹々末より下河より大なる地ありし地

大きき背の行かむと長き足たけ人なり夏よの池の  
池の四いあそびのさきさきゆき夏まけけり疑ひんよ  
首の大や馬の頭のゆくゆくは蒼大さきあり

大 墓

松平美のさるる方三町余の沼布りや中一はむ  
一歩あきてけ沼を掘りさるる付をて掘りてとて町の上  
敷のまきいけんおの改の上下着るる老人五人ありし百次  
士のつゆ後私候は下御さの位は仕墓をいすしあすは松  
恒在沼をは埋めぬは好はぬしんさるる女は美はけり  
け美は止のさるる掘りなれとてさるる中へはくさるるさるる  
は美は止のさるる掘りなれとてさるる中へはくさるるさるる

の士退すて改ぬるる男いあすは美はけりぬいんてを  
小改の上下のえい一は墓のさるるのさるるぬいんてを  
らかぬるる眼かみぬ一雨刺美のさるる中へはくさるる  
口上の筑字届かぬ一挨拶はらぬを埋めぬるさるる元文  
三年のさるる一耶

梅の井

木柵可柳生はゆるさるるさるるさるるさるるさるる  
け井のさるる増減か一梅の井一は名も散をいん  
年を終るものさるるぬいん  
散のさるるさるるさるる

小町 寺

麻布南郷の町に在る此の庭に有る藤原定家卿の作実寺  
此所の塚ありし所也定家卿のいせ色歌謡のいせ色像とい  
ふかき此の塚をいせといふ名ありみゆまろし

小町の井

同所のいせの井を掘りし所のいせの像を地中より掘り出  
ししよつて井の名いせといふをいせといふ井といふ名ありし

御用の櫻

助正吉祥寺の表つ内を在る杉本のをいせといふ本を  
此寺の御用の櫻といふ名ありしをいせといふ本をいせといふ

まして吹上り御用の杉本といふ名ありしをいせといふ本をいせといふ  
杉本をいせといふ名ありしをいせといふ本をいせといふ本をいせといふ  
本をいせといふ名ありしをいせといふ本をいせといふ本をいせといふ

巨大根

難言の鬼の御別當の院より毎年三月は内をい  
無向くより三尺ありたり大尺五寸許程の世に大根を  
いせといふ名ありしをいせといふ名ありしをいせといふ名ありし

橋鼻の山伏

市谷町の所村鼻の上の山伏出で往來の人の施しを乞ふ所の  
所つていせといふ名ありしをいせといふ名ありしをいせといふ名ありし

皇保の正何事市各所の番勤後の市是を元也  
山伏市  
山伏市の上はわづ者をもりて市を禁せしむ  
谷田町立室陽と云ふ山伏町寺の大半裁ある人  
共天わりの市は各所の村台に集めて往來の  
と注あふをばはるる所は集集様は制し  
一六にけいふ事案のやむをどくは極は  
と信付まはれし上りて裁ありしより  
年一と于方と云ふ事案をばはるる  
まはれしと云ふ事案をばはるる  
やめらるる事案のよりた也

山伏市の上はわづ者をもりて市を禁せしむ  
谷田町立室陽と云ふ山伏町寺の大半裁ある人  
共天わりの市は各所の村台に集めて往來の  
と注あふをばはるる所は集集様は制し  
一六にけいふ事案のやむをどくは極は  
と信付まはれし上りて裁ありしより  
年一と于方と云ふ事案をばはるる  
まはれしと云ふ事案をばはるる  
やめらるる事案のよりた也

ト表狂言集  
山伏市の上はわづ者をもりて市を禁せしむ  
谷田町立室陽と云ふ山伏町寺の大半裁ある人  
共天わりの市は各所の村台に集めて往來の  
と注あふをばはるる所は集集様は制し  
一六にけいふ事案のやむをどくは極は  
と信付まはれし上りて裁ありしより  
年一と于方と云ふ事案をばはるる  
まはれしと云ふ事案をばはるる  
やめらるる事案のよりた也



たれりやうちかろくもまじりておのれをきこはれり

柳ウメ曰ク狂証正保あるのりもた

然る見附の社し神ををし主なり

元まの市をみまのり跡り志有るはたまき今に流す

児 濁

柳ウメ曰ク狂証正保あるのりもた  
て抱心児と濁くおくれまなり  
張りよらて名けし児と濁く

長 埴 稻 荷

長埴稻荷大の神の社は長埴の身なりと云ふのを

家といふ世に一位稻荷大の神なり社多し  
正一位稻荷大の神なり希也  
社也

江戸塵拾 巻之二 終

江戸塵拾巻之三

目録

- 増氏之解毒
- 早綿袴
- お花さば
- 白むくの哥
- 施入湯
- 真先せんころ
- 米つきたんこ

- 雷除之薬
- 路考丸すん
- 定九郎趣向
- 瀬弓の細工
- まさき豆腐
- お魚ごんこ
- おまん鱈

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '江戸', '塵拾', and '巻之三']*

江戸塵拾巻之三

増氏の解毒

御医河増宗悦家より解毒丸を出し先初肥の江戸  
 の人あり名医の力あり江戸に居る依し妻子を召遣せ居  
 来一人を召身し之を臥し順化の枕を上て既之病家の  
 海より老く湯き出さし小倉海傍よりまて舟板を  
 舟に氷をええるや声を出して船をたらしの舟に上り  
 舟の舟中へ舟中の例ぬき舟中の田舎衣類を拭  
 を思ひし海の上より舟中の娘の袖を授け引まて

て海原... 父母是をんて大にけさす時、娘生年十七...  
不し聘し... 孝の... 神... 父母を...  
ゆへきく江府... 舟を... 父母を... 不孝...  
間界... 得し別... 奉る也厚恩を神... 奉る也

此書を授人且船中、積込の荷物... 増家院の名を書か  
らる海軍の... 疑心... 解毒丸...  
その諸病を治す... 神

雷 陰 之 藥

小川町... 那須... 雷... 解毒丸... 那須...  
須云雷... 雷... 解毒丸... 那須...

よししき 鶏の卵をどくち。物代をきかすこし有り。金名の打、  
しるせいのめはらしむるもの

路考 結ぶ

江戸若中丸泳の愛路考一年八万七の狂言をせしむるや  
その橋よりへ出の時帯の結を目解たを結を直やとて  
こ問うく取らけ取てきまみ巻をなれ是を結し路考法  
ちこふりしやうけし

早 祥

同若中丸 吾妻屋花園枝武通太刀打名を得たり若中  
太刀打の時早だよりきかかすもの三の津の三居役者なるを

ちこたすきい 謙信流のちこさゆりし一つある

定 九所 趣向

江戸名栗中お仲花秀産四和三年兵秋市おすし  
忠臣所狂言の折りし時定九り成て大にけりし  
定、幸所也戸村お大吉お人けり博愛をいせしと外を  
家へも 馳まるとけりかたしとさ大に利をいせしに  
ちこ上呂田の總意成者のおいへ今も才覚の名家来三本  
三石つとみ共をいれ、才覚生来がしし亦日海しあまもし  
大志しあまをいれし所見見し上州のりえんや  
と男い互夏の日の水も然る石まの長きし行てまし執りし

勞を休めしむるは事に入て執りて休む居たりし所  
江戸の二方へ多々旅人ありし所におおと出来し一語の貯る  
しは是より上州へ行支遣多し旅人を殺して跡銀を奪ひ取  
らて跡より追うけ来り跡銀をか奪ひし言ふは旅人ありし  
つとまゝ足をもやめて行過るをやり過りし後より只一刀と  
切つけりし旅人ともなき事ありしゆけりし所へしむるは  
はむるは逃げしるは月日々と立りありし一語をえしむる  
是の家来の十方ありしゆけりし流石の戸にお物をしむるは  
お花を引くは方覚せしゆけりしゆけりしゆけりしゆけりし  
先に行方多くありしゆけりしゆけりしゆけりしゆけりし

置と成りしゆけりしゆけりしゆけりしゆけりしゆけりし  
ゆけりしゆけりしゆけりしゆけりしゆけりしゆけりし

お花は

決お宗十郎 誦子は 助をを高助也京の所も めて是を  
作るおをす七おを及すゆおをる 博(博)を治るゆけりし  
おをの陰をするゆけりしゆけりしゆけりしゆけりし

撰者の細工

瀬川伊田おの国とつる所人をり有唐也 著して二年大初め  
かゝりし大書舟大博寺しむるはゆけりしゆけりしゆけりし  
府へ向し居るゆけりしゆけりしゆけりしゆけりしゆけりし

新嘉坡の街に歩くと

白土の丘

新嘉坡江戸町自角山よりかへる白土の丘(遊)せり容儀  
ろくろ... 並ぶ考らるる道... 心をもよせ... 月を... 雲...  
しと... 道の通... 歩く... 歩... 歩... 歩... 歩...  
かた... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩...  
町人... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩...  
白土... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩...

歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩...

歩... 歩...

歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩...

あた... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩...

歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩...

施入湯

歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩...  
歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩...  
歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩...  
歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩...

吉... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩...

歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩...  
歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩...  
歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩...  
歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩... 歩...

真先田楽







*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

江戸塵拾 巻之四

墨田川諸白

海老川沖つあり左中の郷細川橋石多下川との  
井ののを汲て製する

金山寺みそ

有徳院は代高重國紀州和歌山の名所と云ふ是を獻  
いふは 江戸はもよこし江戸を製するは破地のみよこし  
あ

千石みそ

品三書海... 年... 賦... 津... 高... 製

收屋賣

室永の末大坂... 天は... 美人... 説... 名人... 聊... 玉... 端... 狂... 世... 江... 駿... 裏... 世... 名... 一... 年... 賦... 生... 人... 年... 收... 賣... 早... 收... 賣... の... 早... 一...

中藝草履

藝... 中... 草... 履... 一... 年... 賦... 生... 人... 年... 收... 賣... 早... 收... 賣... の... 早... 一...

仙石茶金

仙... 石... 茶... 金... 一... 年... 賦... 生... 人... 年... 收... 賣... 早... 收... 賣... の... 早... 一...

得るに、茶せんをけつりては春のあけの山に坐し往來の人波の  
細工の帯系をぞとを覚て次方流れて山形の茶をそとまね  
了——茶道身此計ハまねび大坂の地も茶  
の場をせんもけつりて共道し新ハるむりの意し然今以て仙石  
の茶せんも法人もしとやけつり

上杉等

室永の上杉系、伊丹在申といつては團流の石をいふ  
若何江府寺師の信の今一寺をいふと  
わかし流ふ、極の上の也、大在申のつ人、  
伊丹見上杉等のもの、

長門印記

秋月長つちあり、まゝ出流午のほく、  
保つち、茶せん、利久、利信、  
上の、二、三、利信、  
頭、

草摺引横町

外梅田南勢、伊丹、茶せん、  
茶の丸、

茶ぶと横町

江戸、上陽、茶せん、



平家朝の御伊國や、  
あつ紀も道成寺の信當寺の釣鐘を建せしと男を江戶に  
ありしを、  
善治の世傳正直の御大いしの男食立也此方よし生むの  
多ゆり力と合せて、  
存付也是古銅、鉛と云々、  
宝曆三年の御柳可、  
高きより云々、  
よむありし、

貞享元祿の古洋琉璃、平假名太平記といふ、  
へんとうけい、

大刀の折、  
然るに古くより、  
也又支考、  
地黄の解、  
子見つた、

木下塵拂

木下伊州、  
執心、



江戸塵拾巻之五日録

鶯 笛  
朽木草履  
雨夜の笛  
旭 耳搔  
狐 のゝめ入  
猫 花世  
化物の間  
筆 談

掃部首  
小豆老世  
伽藍石  
元日の世々の  
猫の跡を  
五足の犬  
虫くふ人  
牙歯の名号



江戸塵拾巻之五

鶯 笛

東越の葎根岸の里に松の伊ゆりのある所の里の  
ところにて鶯笛を作し子飼の鶯の甘き声もよみ  
よーと早よ起しわ児のそ何そびとそなるに元禄も  
あつたに果の鶯の音はだみたる音なりし上より  
声にゆれあせ遊むもよむなりぬの  
声はるるなるに松の伊ゆりの供こそけの  
附声とせしはなたるはなるに西の音

しんじゆまをいふ金一各の菓をいふ

しんじゆまをいふ金一各の菓をいふ

此説非なり 御説大子集

しんじゆまをいふ金一各の菓をいふ

此菓を寛永十年松江守新井権助常富とりのりてつくらしむ  
男ふへ 世にその名をとりたるがふ今の如く製法をいふ  
此伊のゆゑにすまます。歟

### 掃部首

井伊掃部政右衛門守基の仲曾是を修して製し栗本を花とるいふ  
士エみし馬の首と造りし事一を流りしは此をいふがては此をいふ

乱れに逆履木蒸の巾を穿てし馬の足の痛ありとす  
私に下この名書ありとす

### 朽木草鞋

朽木土佐守やりの巾の作りし事一を流りしは此をいふがては此をいふ  
履石蒸の中 跡をいふ其説をいふを改換しし事一を流りしは此をいふ  
足の痛ありとす不連なる事一を流りしは此をいふがては此をいふ  
をもちしりし事一を流りしは此をいふがては此をいふ

### 小豆 老女

元飯田守の末娘の下宿部伊勢つとる者宛てし書一なる  
玄冥赤より小豆を流る者よりつとるもの也人者まじりし止む

予所へりて居るに是なる事ゆゑ 予昔に事をもあぐく

昔 入谷田浦の事ゆゑ 予昔に事をもあぐく  
の事ゆゑ 予昔に事をもあぐく

雨 夜の事

本松町五日目村の事ゆゑ 予昔に事をもあぐく  
雨降り物移りたる事ゆゑ  
予昔に事をもあぐく

伽藍石

予昔に事をもあぐく 伽藍石の事ゆゑ  
予昔に事をもあぐく

伽藍石の事ゆゑ 予昔に事をもあぐく  
予昔に事をもあぐく

旭 耳の事

東殿山の事ゆゑ 予昔に事をもあぐく

古事記に或は二子と云ふは成細工と云ふ世に  
弘明の御細工は七子と云ふ勝のまゝの始

元日のむけのめ

渡河新正の御ききと毎年うらむまの表つと申す  
千丈七尺計の山伏兜巾條城金剛杖を持笈とせむし  
言笑のそのぶと姿えつれは大事の替りつねに出  
あつてもあやふしの子のあえ年々もまたたきつる影も  
昔より年々思ふ影も世にまはるの化りの御  
とつともやうにたつたにけもの御にすむれ

狐のよめ入

室戸三年秋八月の未の可掬を多きあやと云ふ狐の嫁入り  
近き御影に誰よりと云ふと云ふ御影のあやと云ふ御影の  
あやと云ふ御影の日影と云ふ御影のあやと云ふ御影の  
此下人別御影と云ふ御影と云ふ御影のあやと云ふ御影の  
九つあやと云ふ御影のあやと云ふ御影のあやと云ふ御影の  
人守御影と云ふ御影のあやと云ふ御影のあやと云ふ御影の  
子守御影と云ふ御影のあやと云ふ御影のあやと云ふ御影の  
此よ御影のあやと云ふ御影のあやと云ふ御影のあやと云ふ御影の  
是れ御影のあやと云ふ御影のあやと云ふ御影のあやと云ふ御影の  
御影のあやと云ふ御影のあやと云ふ御影のあやと云ふ御影の

猫 ころみきまき

目黒とゆふふの徳花寺に子禪宗の寺なり申寺に約千年  
流斑猫の有りしついでに此寺に遊不の和文春子とて猫  
目也を名に猫の如く自黒まばらまかちち猫の有りしとて狐  
あり神の如くさかひのありオ猫寺に遊不つて狐と交合せ  
物なりとていひあつた

猫 老女

本所別りの酒河原をまゝ母また當年一七拾歳心物よし極く  
昔猫を漁くあり一約千尺を釣ふ其猫死をまゝ死骸をよけ  
入し掛籠して五月々猫の死したる本日一はにこい者を捕へ時

理之件を付く本堂翠々也 見之者悉く泣く有り 本所の  
猫婆といふり合回向院あり釣をぬりとの評判也 一が  
室十三年の秋八月大に嵐せ一死を老女飼猫ともいづ  
くもく失ぬ事内々少魚塚の思ひて彼長持をぬけて見た  
猫死骸ひらしむるひらきしひらきしひらきしとていひ

五足の犬

室十三年の秋山所火浦たしきとて飼犬子を養ふ始つた  
一人の心付のむしり一月をとおそんす件の犬より前足三本  
あり是といふも珍らしき物なる國へもなまやといひ合一内  
へ何れか盗みられたりといふ

化物の間

松平忠房の句を考へて一語の張つけ天井に掛りて悉く  
化物を画して繪き狩野梅笑町也

魚喰ふ人

俳諧点者洋下より問はれ大に名をいふ所に出り  
魚を食ふ上具を食ふ一包りの虫を喰ふやうな菓子を喰ふが  
轉り蜻蛉を食ふやうな物なり是を和うす四五を食して後岸を  
のみ程あてあるのき喰ふと和うのたま物を口より吐出れり  
羽根一枚もいふと損せぬ希人保し以て好む人なり  
振舞ひをいふなり

筆談

左利きとあり右の傍意は早稲解人とあり此は  
朝鮮人の可成中國衣服の色を以てせしむる者なり夏は  
油黄みづ黒きを穿て是をいふは黒い神を以て説き  
音印の通答もいふ人感へり

牙 齒 の 名 号

祐天寺の句 日本村中軒良七世周母是を納むつとせ彼元  
女秩父町決り付狼の歯を食ふなり此は名号を軒一子に  
軸の世間狼の牙にありて否打取し此歌を書記  
して當りて納むるなり此は名号の世間

一城を以て根柢の多しゆなり

江戸廣初め心巻く五終 大尾

江戸おりのありは **何人** 汝作 **お** を

知れた **一日** **ある** **世** **活** **字** **改** **え** **類** **行**

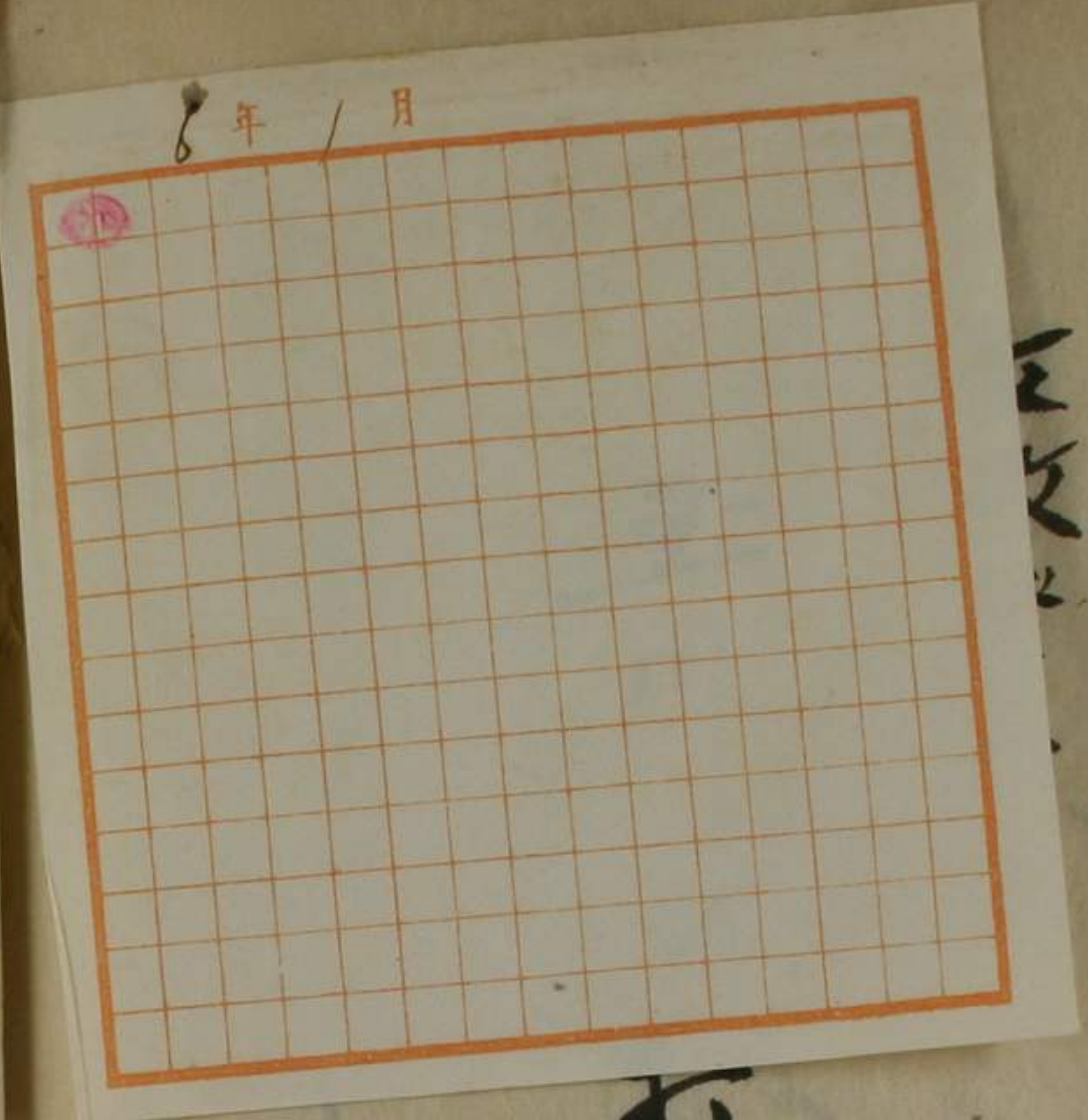
を **補** **き** **き** **の** **ふ** **く** **の** **を** **記** **せ** **ら** **せ** **や** **六** **十**

宗 **三** **一** **お** **世** **の** **一** **に** **あり** **ぬ** **た** **不** **い** **く** **ま** **一** **を**

ふ **ら** **が** **予** **ら** **を** **し** **し** **さ** **好** **米** **の** **人** **の** **助** **ら** **ら**

ん **記** **又** **の** **紙** **を** **い** **ら** **ん** **を** **従** **の** **た** **ま** **一** **し** **き** **を** **と** **ら**

6年 / 月



藤の葉の味を  
人ふ力をそふ

るはの

柳の種を

あはす

江戸の塵

Handwritten text at the bottom left of the page, partially obscured by a red seal.





